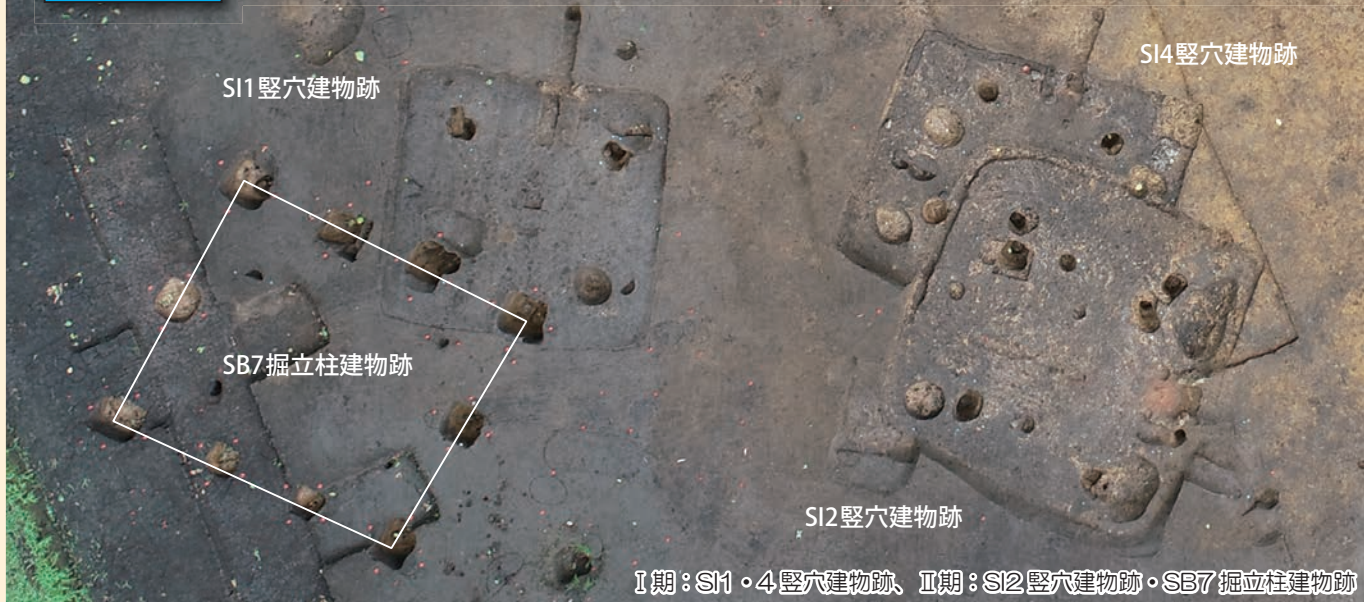


発掘速報

工場建設に伴う山口遺跡の発掘調査を行ないました
奈良・平安時代の集落跡を発見!!



塩沢地区の山口遺跡の発掘調査で、奈良・平安時代の集落跡の一部が発見されました。今回の調査は山口遺跡・戸の内脇遺跡の範囲内で計画された工場建設に伴うもので、昨年4月～7月に野外調査を、その後室内整理作業を行ないました。調査の結果、山口遺跡の範囲内で奈良・平安時代の竪穴建物跡6棟、掘立柱建物跡1棟が確認され、素焼きの土器である土師器と窯で焼成された須恵器、鉄製品などが出土しました。

集落は遺構の重なりや出土した土器から I 期：奈良時代終末～平安時代初頭（8世紀末頃、約1,200年前）、II 期：平安時代前葉（9世紀後半頃、約1,150年前）に

分かれます。I 期には竪穴建物跡3棟があり、北側にカマドと煙出しのトンネルが掘られています。出土した土師器は須恵器の技法を取り入れてロクロを使用し始めた時期のもので、町内では初めての確認です。このほか、塩作りの土器と考えられる薄手の土器や、まじないに用いられたと考えられる小型の手捏ね土器が出土しました。塩作りの土器は沿岸部から塩の流通があったことを示しており、これも町内では初めての発見です。

II 期には竪穴建物跡3棟、掘立柱建物跡1棟があります。竪穴建物は掘立柱建物の周囲に配置されており、掘立柱建物の反対側にカマドと煙出しを設けていることから、掘立柱建物が中心施設であったことが窺われます。



I 期の出土品。右手前の小さな土器片は塩作りの土器です。



II 期の出土品。鉄鏃や刀子、穂摘具などの鉄製品があります。

掘立柱建物跡は役所や寺院の施設として建てられることが多く、一般の集落では稀です。Ⅱ期の竪穴建物跡からは戦いで用いる鉄鏃（鉄の矢じり）や文字を書き記す木簡を削る道具である刀子（小刀）といった軍事・行政に関わる遺物のほか、役所や寺院などに多く流通した福島県会津地方の大戸窯産の須恵器も見られることから、地方の村落の中で末端行政に關与した人物の居宅が営まれた可能性が考えられます。

これまで塩沢地区の円田盆地西側での遺跡の発掘調査はあまり行われておらず、町内の古代の様相を知る上で貴重な成果が得られました。



SI4 竪穴建物跡のカマド。両側に伏せて立てた土師器の甕を芯にして粘土を貼り付け、ドーム型のカマドを作っていました。奥にのびる溝は煙を屋外に排出するために掘られたトンネルの跡です。火を焚いた部分の土は赤く変色しています。

山口遺跡発掘調査ダイジェスト



現場事務所のプレハブが搬入されました。機材を搬入しいよいよ発掘調査開始です。



法面用の平らなバケットを装着した重機に指示を出しながら表土を掘り下げていきます。



調査区の地面を人力で削り、残っている表土や新しい時代の地層を取り除いていきます。



調査員が土の違いを観察しながら、遺構の可能性のある部分に線を引いていきます。



竪穴建物跡の掘削を始めました。地層観察用の畔を残して当時の床面まで掘り下げます。



カマド周辺を掘り下げていくと、粘土で構築されたカマドの本体や土器が現れました。



掘立柱建物跡の柱穴に残る柱材の痕跡。



内面を丁寧に磨き黒く焼成した土師器。



出土した土器は水洗いして写真撮影・位置記録の後、丁寧に上げます。



発掘調査がほぼ完了した調査区全体の空撮（真上写真）。

発掘速報

県指定
文化財

丈六阿弥陀如来坐像の謎に迫る！

「平沢阿弥陀堂」推定地で東北学院大学による試掘調査が行なわれました

平沢地区の保昌寺に安置されている「丈六阿弥陀如来坐像」(県指定文化財)は、明治42年まで平沢字丈六地内の丘の上の阿弥陀堂に在りました。その様式から平安時代後期の作とされ、現地にはその傍証となる樹齢900年の「平沢弥陀の杉」(県指定天然記念物)が現存し、境内の杉並木の名残を留めています。

当時の岩手県平泉を本拠として東北地方一円を支配した奥州藤原氏は、人々を極楽浄土へ導く阿弥陀如来を篤く信仰し、平泉を中心に東北の要所に阿弥陀堂を建立しました。平沢の阿弥陀堂もそのひとつと推定されますが、明治時代に残されていた堂舎は江戸時代中期(1710年)に平沢領主の高野武兼が再建したもので、奥州藤原氏が関与したであろう当初の阿弥陀堂がどのようなものであったかは不明でした。

この謎を考古学的に解明することを目的に、昨年7月30日から8月10日まで、東北学院大学文学部歴史学科による試掘調査が行なわれました。調査の結果、阿弥陀堂跡の推定地は後世の造成によって地形が大きく改変され、その痕跡は残されていないことが判明しました。しかし、北西側にわずかに残る平坦面では江戸時代末期の古銭(文久永宝)が出土し、江戸時代以前に造成された平場の一部と判明しました。

古銭の出土は、江戸時代末期から明治時代にかけて阿弥陀堂の荒廃が進みながらも、依然として地域の人々の信仰を集めていたことを示すものです。また、阿弥陀堂本体の遺構は残されていないものの、周辺から阿弥陀堂に関連する出土品などが得られる可能性があることが分かりました。



丈六阿弥陀如来坐像(保昌寺)



寛永通寶



文久永宝

平場から出土した古銭。いずれも江戸時代のもので、「文久永宝」は1863～1867年に鑄造された江戸時代最後の銭貨です。

試掘調査の様子。古銭が2点出土し、江戸時代以前に造成された平場の一部が残存していることが分かりました。

文化財トピックス

我妻家住宅の屋根葺き替えが完了

～令和7年度に5か年の保存修理事業完了へ～

曲竹地区にある国の重要文化財 我妻家住宅で進められていた主屋の茅葺屋根の全面葺き替え工事が完了し、昨年11月23日に特別公開を行ないました。工事は令和3・4年福島県沖地震の災害復旧(土壁修理など)と経年劣化に伴う保存修理(屋根葺き替え・床工事など)のため令和3年度から5か年計画で進められてきたもので、中でも今年度実施した主屋の屋根葺き替えは約20年に一度の大規模な修理となります。

令和7年度には残る土壁の修理などを行なって5か年にわたった保存修理事業が完了し、秋以降には一般公開を再開できる見込みとなっています。



葺き替えの終わった主屋の見事な茅葺屋根を見学する参加者の皆さん。高所のため人数制限を行ないながらの見学となりました。我妻家住宅の主屋は桁行19間半(長さ約37m)の長大な建物で、江戸時代の民家としては稀に見る大規模な建築です。こうして足場の上から間近に見学出来るのは茅葺屋根の葺き替えサイクルの目安である約20年に一度の貴重な機会です。

文化財トピックス

第25回文化財展「発掘された遺跡から見る蔵王山麓の暮らし」を開催

～関連企画：民俗記録映画「奥会津の木地師」上映会で十郎田遺跡出土木器の意義について考える～

町内でこれまでに行なわれた発掘調査の中から、縄文時代から江戸時代までの各時代の主な遺跡の成果を紹介する文化財展を昨年10月19日から12月8日までの49日間、町ふるさと文化会館で開催しました。

今回の展示品のうち、十郎田遺跡で大量に出土した鎌倉時代(約750年前)の木器(手挽きロクロを用いた挽物椀・小皿の未成品)は、当時の職人の技術や製品の流通を考える上で全国的にも貴重な資料です。

期間中の11月30日には、関連企画として文化財セミナーを開催。約100年前の奥会津の木地師の生活と技術を記録した映画を鑑賞した後、展示室で十郎田遺跡の出土品を見た参加者からは、数百年の時間差を感じさせない技術の類似性に驚きの声が上がリ、日本の伝統文化の素晴らしさに感じ入ったようでした。

▶十郎田遺跡出土木器 ロクロ鉋で削る前に手斧で大まかな形を整えた「荒型」と呼ばれる状態で、水溜めの中から180個が出土。電動ロクロが登場する昭和初期までの数百年間以上にわたり、ほぼ変わらない技術が受け継がれました。



町の歴史と文化財に触れる

～各学校と連携した出前授業を行なっています～

町教育委員会では、各学校の先生と連携して小学6年生の歴史の授業に合わせた出前授業や、中学1年生の「蔵王を知る研修」などに合わせた研修・体験活動を行なっています。史跡や古民家、神社を現地で見学したり、出土品や民具の実物に触れたりすることで、教科書で学んだ歴史が蔵王町の歴史や文化財、そして現在の暮らしにも繋がっていることを知り、地域に愛着を持って暮らしていけるように願っています。



樹齢約900年の平沢弥陀の杉。何人で一周できるかな！？

【公式SNSを開設しました！】 フェイスブックでは蔵王町の歴史と文化財に関する情報を、インスタグラムでは縄文時代の集落跡 谷地遺跡の出土品を紹介しています。下記のQRコードからアクセスしてフォローをお願いします！



Website



Facebook



Instagram

最新の情報はWEBでチェック！！

蔵王町の歴史と文化財 公式ホームページ

どきたんドットコム <http://www.dokitan.com>

蔵王町の歴史と文化財 どきたん通信 No.009

令和7年(2025年)3月発行 [不定期発行]

蔵王町教育委員会 生涯学習課 文化財保護係

〒989-0821 宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦5番地

TEL 0224-33-2018 FAX 0224-33-2019

E-Mail info@dokitan.com WEB <http://www.dokitan.com>